

北朝鮮からの避難日誌

東京都 三木 梅子

この度、この引揚労苦記録をまとめるに際して、父が残してくれた避難日誌を何十年ぶりに改めて紐といた。わら半紙をとじた粗末な物で、すっかり赤茶けているが、懐かしい父の筆跡も、透かして見なければ読めないくらいに書いてあるが、誠にこまめに当時のことを綴っている。最後は、「昭和二十一（一九四六）年一月十三日、記す」とあり、もう五十九年の歳月が流れてしまったのだ。

父は、明治二十二（一八八九）年に東京で生まれ、明治四十三年八月の日韓併合という歴史の流れの中で、一大決心をして北朝鮮の元山に渡り、建築金物業を営んでいたが、その後、火薬類の取扱い業を専門とした。当時の北朝鮮は石炭の埋蔵

量が豊富で、その発掘の際の発破作業に使用する火薬類も莫大な量で、実業家としては成功した一人であった。

そんな家庭に、私は大正十四（一九二五）年一月十七日咸鏡北道会寧邑で生まれ、何不自由なく成長し、会寧高等女学校を卒業。時節柄家にいることもならず、陸軍の軍馬補充馬廠に勤めて、そこで八月十五日の終戦まで勤務していた。

昭和二十年八月八日の早朝、満州の放送局からのニュースで、「ソ連軍が、満ソ国境の各地から戦車を先頭に怒濤のごとき勢いで、満州国内に侵入してきた。国境周辺では日満両軍と交戦中である」という思わぬ事態を報じた。

この日から満州、朝鮮は風雲急を告げる事態になったが、私は軍属として補充馬廠に勤務しているので、満州国内の状況は刻々として知っていて、危機感が高じていた。しかし、状況は分かるが「これからどのようなのか?」「私たちはどうなるのか?」などの実際問題については、全

く理解ができなかった。まだ遠く離れた満州国境
でのことであるという安心感もあって、平常通り
の勤務を続けていたが、ソ連軍の侵攻した二日後
あたりになると、ここ会寧の町外れには、北の方
向から逃れて来た避難民の人たちが、ぞろぞろと
列をなして歩いて来た。「どこから逃げて来たの
ですか？」と尋ねると、その人たちは「羅津・雄
基方向からここまで来た」という返事だった。推
察するに、もうそのころになると、ソ連軍は日本
海側に面している朝鮮の港に攻めて来たらしかつ
た。続々と歩いている避難民の姿を見ているうち
に、「すぐに私たちもこうなるのか？」という思
いが走り、胸が痛くなった。しかし、まだそのこ
ろは会寧市街全体には大きな混乱もなく平常状態
で、住民も落ち着いていた。

八月十二日、早朝出勤する途中で、陸軍官舎の
前に補充馬廠の幹部の家族が荷物を背中に背負
い、両手にも持って避難するかっこうで集まって
いるのにぶつかった。私はびっくりして、「どう

したのですか？」と声を掛けると、その人たちは
「南に避難するので、これから会寧駅に向かいま
す」という返事だった。それを聞いて私はびっく
り仰天だった。もう事態がそこまで、ひっ迫して
いるのかと思うと同時に、私たち一般人を置き去
りにして逃げるのかという、何ともいえない憤り
を覚えたものだった。私は急いで勤務先に行き、
別れの挨拶もそこそこに家に戻った。しかし、一
般人にはまだ何の指示もなく、その日は不安を高
めながら過ぎていった。

翌八月十三日の早朝、市街の様子を見るために
中心地に行ったが、まだ市中は森閑としていて、
ソ連軍が近くまで来ているというような緊迫感
は見受けられなかった。

当時を振り返って思うには、もうこのころの軍
や警察は、何の権威もなくなっていて、ばらばら
になり統制もとれなくなっていたのではないかと
考えた。一般の日本人は、それぞれ自分たちの考
えで避難準備をしていたようである。外向きには

静けさを装ってはいたが、それぞれの家では、てんやわんやの騒ぎであったようだ。

我が家でも、ひっくり返るような混乱で、まず貴重な品々とか衣類、家財のおもだった物は庭の防空壕に詰め込み、上から嚴重に蓋をした。防空壕はレンガ造りの頑丈なもので、「ここに入れておけば大丈夫だ！」という安心した気持ちであった。父をはじめ家族みんなは、当然事態が落ち着いたらすぐに戻って来るといふ気持ちであったし、誰もその気持ちに疑いは持っていなかった。

当時我が家には、両親の他に長姉夫妻、そして八歳になる女の子を頭とした四人の子供、次姉とその子供二人、それに当時二十歳になった私を加えて十二人という大家族であった。

八月十三日の夜七時ごろ、茂山に向かって避難するようにという指示が伝えられた。あらかじめ準備してあった大八車に、産後まだ日が経っていない長姉と生まれたばかりの赤ん坊、それに次姉の二歳になる長女を乗せ、寝具や当座必要と準備

をしていた家財道具を積み込み、父と義兄が引き手となり、リヤカーに必要な食料品やその他の品々を積んで、次姉と私が引いて行くこととなった。母は、次姉の長男である生後五カ月の子を背中にして両手に荷物を持ち、一応歩ける三人の子供たちにも、それぞれにリュックサックを背負わせて我が家を出発した。しかし歩き出してももの三十分も経つと、みんな悲鳴をあげ始め道路に腰をおろしてしまった。他家の人は、どんどんと追いついて行った。無理は禁物とばかりに落ち着きを決め込んで、そのままそこで野宿をすることになった。

明けて八月十四日は、夜が明けるのを待って出発したが、昨夜の蚊の襲撃でみんなの顔や手足がぼこぼこになっていて、お互いに顔を見合っては吹き出す始末だった。まだまだ気持ちのうえでは余裕があったが、握り飯を食べながら、周囲を見回したところ、我が家だけかと思っていたのに、まだ大勢の人々がいたので安心した。「さあ！

元氣を出して！ 出発するぞ！」という父の声に立ち上がり、遊仙に向かって歩き始めた。その夜は、遊仙で泊まることになっていた。北朝鮮の夏は昼間はジリジリと焼けつくような暑さだが、太陽が沈むと途端に気温が下がり寒くなってくる。父と義兄は大八車を引いているので、その背中は日焼けして火膨れができていた。遊仙では炭鉱の納屋で寝たが、昼間の疲れですぐに眠ってしまった。

八月十五日、明け方近くに馬の嘶いななきで目が覚め、何事かと急いで外に出てみると、補充馬廠と一緒に勤務していた兵隊さんたちの懐かしい顔があった。思わず駆け寄って無事を喜び合った。つい数日前に別れたばかりなのに、妙に懐かしさが込み上げてきた。部隊は、南の平康に向かうとのことで、またの再会を約して別れた。

私たちは、茂山に行くためにまず五国城に向かうこととなり、身仕度を整えて出発した。急な山道で大八車やリヤカーを引っ張り上げるようにし

ながら登るのだが、最初はすぐきつくて青息吐息だった。しかし、だんだんとその動作にも慣れできて、思った以上に順調に進み、昼過ぎには五国城跡に着いた。はるか彼方に、会寧らしき市街地が眺められた。煙のようなものが立ちのぼっていたが、よく見ると火災のようだった。会寧市街も暴動で焼き討ちになっているのかと思ひ、気持ちもだんだんと滅入ってきて、何ともやりきれなくなってしまった。手前の豆満江は、あたかも一本の帯を無造作にほどいたごとくに曲がりくねっていて、流れも止まっているように見えた。

桔梗キキョウ、女郎花オミナエシなどが咲き乱れていて、秋が近くなってきたことを感じた。そのころは晴天が続いていたので、避難行は随分と助かっていた。豆満江に沿って昼間は歩き続けて、夜は野宿か途中の部落で宿を探して、屋根のあるところで過ごしながら茂山に向かった。

八月十九日ごろになると、通りかかる部落の人たちの態度がどうもおかしいことに気が付いた。

「何かあったのか？」と、みんなで話しながら歩き続けたが、途中で「日本が負けた」ことを知った。みんなは絶望のどん底に落ちて、誰も言葉を発する者もいなかった。「もう、このまま日本に帰ることはできなくなるのか？」と一時は考えたが、しばらく歩いていると「こうなったら日本に帰る道しか残っていない！」と悟るようになって、ただ南へ南へと歩くことしか考えなかった。

「帰る日本」という目的地があるということだけが慰めであり、何よりの心強さであった。そして、何としても実現しなければならぬ目的であった。

八月二十二日、やっとの思いで茂山に着き、ほっと一息ついたと思う間もなく、そこにソ連軍が突入して来て、みんなは慌てて森の中に逃げ込んで難を免れた。みんなが期待していた茂山で、少しばかり休んで英気を養うということも、夢のまた夢となってしまった。茂山での長居は無用と、白岩に向かうことになったが、これからは奥

深い山中を歩くようになった。

八月二十三日、会寧を出て十日が経過した。長いようでもあったし、短いようでもあった。まったく夢の中での出来事のような気がした。歩かなければ目的を達成できないと考えれば、どんなに苦しくとも歩かなければならなかった。みんなの足並みもやっと板につき始め、文句を言わずにただ歩くことが私たちの生きる道となった。

茂山を出てしばらくすると、リヤカーが壊れてしまったので、私は荷物をリュックサックに詰め直して背負い、子供三人の手を引いて先頭を切って歩いた。北朝鮮の山々は懐が深く、山の頂が幾重にも重なっていたが、それを見上げて「あの頂に行けば何かよいことがありそうだ」と考えると、希望がわいてきた。「何かよいこと」というのは、人家があって、そこに食べ物があるという淡い望みである。そのころになると、食べることのみが話題となっていた。しかし実際は、やっとのことで頂上にたどり着き前を見ると、それまで

と一向に変化のない山、また山の景色であった。一緒に手をつないで歩いてきた長姉の長女が、「いつまで歩くの？」と、くたびれた顔で私に聞くので、私は「まだまだよ！ いつまでも、いつまでも歩くのよ」と答えたが、私にはそれしか答えることができなかった。

「休憩」という声が掛かると、みんなは荷物を放り出して地べたに座り込んでしまった。座り込むとすぐに居眠りが始まった。どのくらい経っていたのかは分からないが、「よいしょ、よいしょ」という父や義兄の掛け声が、大八車のきしむ音と共に聞こえてきた。それまで疲れてぐっすり寝入っていた子供も、その声と音で目を覚まして、「おじいちゃん！ お父ちゃん！」と、大きな声を出して父や義兄を迎えていた。一家がそろい、しばらく休憩をとると、そこで今夜の野宿場所を相談して決めるのだった。

そこからは、険しい興岩嶺を越えなければならなかった。そろそろ十五夜なのか、歩いていても

辺りは明るくて、大助かりであった。やがて月が出てきて、昼間のような明るさが周囲の鬱蒼とした木々に映えて、夜というよりも夜明けのごとき様子で、そこを避難民の列が続ぎ後の方までもがよく見えていた。さっき、「いつまで歩くの？」と言った長女の言葉が、歩きながらも気に掛かっていて頭から離れなかった。私自身、その言葉を反復して考えていたが、どんなに思い巡らしても分からない。そのうえに、「私の方が、みんなに聞きたいくらいだ」という結論になり、一人でほくそ笑んでいた。

私には、いつまで、どこまで歩けばよいのかということは、いつまで生きるのかということと同意義だという考えが浮かんできた。一つの山を登り山頂から次の山を見ると、人生は全くこれと同じで、とらえどころのない不安が、もくもくとわき上がってきた。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人の言う」という言葉がふと浮かんできて、何かしら夢を与えてくれているような気持ちにも

なっていた。

八月二十四日、延水付近で野宿をしていたときに、ソ連兵が侵入してきたので一台残っていた大八車も捨てて逃げた。産後に日が浅かった長姉も幸いに順調に回復していたので、歩くことができようになるようになって、自ら赤ん坊を背負った。次姉は自分の長女を、母はその長男をそれぞれ背負い、三人の子供は今まで背負っていたリュックサックに、さらに衣類などを詰め込んだので、大きく膨らんでいたが、我慢させた。父、義兄、それに私は必要な食べ物を中心に、これからの避難行に絶対必要となる品々を詰め込めるだけ詰めて背負うことにした。あまり重くて一人で立ち上がることができなかつたので、お互いに助け合っ立ち上がった。立てば何とか歩くことはできた。父は「さあ！ 気を引き締めて歩こう」と元気づけてくれて、自分が先頭に立って歩き始めた。

八月二十五日、延水林間にて野宿。見ると草むらには蛍が飛び交っていた。義兄もそれを見てい

てハンカチを被せて数匹を捕らえ、子供たちに見せていた。緊張の中にも、こんな和やかな温もりを持った場面もあった。

八月三十一日の夜間、保安隊員のような一青年が私たちの所に来て、白岩まで行く列車が出ることを知らせてくれた。それを聞いて、暗闇の中を物音を立てないように、そろそろと歩いて線路上に停まっている列車に乗り込んだ。しかし、そこには全く人氣がなかった。本当に白岩まで行くのかと疑問に思うと、不安がつのってきた。

しばらくすると大勢の人たちが乗り込んで来た。体を動かすこともできないぐらいの混み様となった。ふと、あの保安隊員が事前に私たちに知らせてくれたのはどうしてだろうかと、不思議な気持ちになった。そして列車は動き出した。

九月一日の昼十二時ごろに白岩に着いた。駅の近くにある鉄道寮に収容されたが、そこにも大勢の避難民がいたので、ほっとした気持ちになつた。しばらくここに留まることになり、收容所生

活が始まった。

九月二日にこの鉄道寮で、「東京湾の米戦艦ミズリー号上での降伏調印式」のことを聞かされて、やっと日本が負けたことを確実に知ることができた。ここで八日間もいたが、父が記した手帳にそのころの食料品などの値段が書いてあったので、参考までに記す。

牛肉百もんめ匁十円、ジャガイモ一升ます五円、キャベツ一個十円などである。

白岩は海拔一、四三〇メートルの高地なので、九月となると朝夕は寒さが厳しくなり、初霜がおりたのには驚いた。

九月八日夕、白岩を出て吉州に向かうことになり、一応列車に乗せられたが、有蓋貨車なので雨や露は避けられたが、空気が悪かった。

翌日、吉州の一つ手前の駅で降ろされ、そこから歩いて蘆洞に向かった。途中で一人の老婆が置き去りにされていたが、私たちの監視のために同行していた保安隊員から「一緒に連れて行くよう

に！」と厳しく要求され、父は受け入れることになった。義兄と他の男性二人の四人で担架を作り、それに乗せての避難行となった。そのとき、私は「女、子供が主力のこの避難家族が、どうしても犠牲にならなければならないのか？」と大いに憤慨したものだった。父も、当初は保安隊員の一方的な言い方に懨然たる表情をしていたが、当時の状況からして保安隊員の申し出に逆らうこともならず、黙々と面倒をみていた。休憩時に、父はそのことについて「歳をとっていかわいそうではないか」と、ぼつりとひと言もらしていた。それを聞いた私は、それでも内心では納得できずに面白くなかった。

一日中歩き続けて、夕方近くになって桃衣という寒村に着いたが、そこでは避難民の長い行列が続いていたので、どうしたのかと聞くと、「この村を通過するには、所持品検査があつて、そのために列がながっているのだ」とのことだった。まだ西日の強いときだったので、そこに並んでい

ては老婆には耐え切れないだろうと思ったのか、父は列の先頭に行き係の保安隊員に事情を話したらしく、戻って来て、「検査をせずに通る許可をもらって来た」と言った。最初の申し出は、「老婆だけでも日蔭で休ませて欲しい」ということだったが、保安隊員は「あなたの家族全員通ってよろしい」という返事だったそうだ。朝鮮人は儒教の教えをよく守っていて、特に老人に対する尊敬といったわりの心は厚いことだった。ぶつぶつ言っていた私も、このことでは頭のさがる思いだった。検査を受けている人は、所持品を改めて見られて、めぼしい物は取り上げられていた。その夜は野宿だったが、そこで老婆は亡くなった。スコップで穴を掘り手厚く葬った。私は、悔悟の念を持って老婆に手を合わせた。私たち一家は老婆を助けたのではなく、逆に老婆によって略奪ということから助けられたことになったのだ。廬洞での保安隊員からの依頼に対し、その責任を果たした気持ちにもなり、何となく心の軽や

かさを感じたものだった。いつも遠いところにいる存在だった父が、この避難行によってぐっと身近な存在となり、父の偉大さを改めて知るところとなった。

九月も中旬になると、朝夕はめっきりと冷気が加わり、野宿の日ごとに冬が一步一步近づいてきたことを肌で感じた。廬洞、鶴中と、駅ごとに所持品検査があつて、その都度何かしらめぼしい物が無くなつていった。当面の目的地、城津に向かい、夜遅く市外の女学校跡にたどり着き、そこでやっと眠りについた。

少し眠ったかと思う間もなく、不意にソ連兵が乱入して来た。私は、思わずそばにいた甥を抱き寄せ体を小さくして、顔を床につけて伏せた。懐中電灯を照らして、室内を物色していたソ連兵は、女性三人を引きずって出て行った。その家族は狂気のごとくに哀願したが、聞き入れられず、靴音を荒々しくたてて出ていった。そのときの様子はいつまでも鮮明に私の脳裏に残っていて、恐

怖感にさいなまれた。連れ去られた女性は翌朝になって帰されたが、私たちはその人たちの顔をまともに見ることは、とてもできなかった。

翌朝起きると、すぐに出発して城津に向かった。九月十六日城津に入り、市内の国民学校に集結したが、その人数はおおよそ六千人ぐらいいたように記憶している。ソ連兵による暴行、略奪はますます激しくなってきた、ソ連兵が来ると女性は校舎の床下にもぐり込んで隠れていた。父が筵じよを通気口から差し入れてくれたが、ここは絶好の隠れ場であった。夜中にソ連兵が押しかけて来ると、階上の男性たちは洗面器やバケツなどを叩いて、音を立てて追い払っていたが、床下にいる私たちはいつ、どうなることかと、寝るどころではなかった。長い夜が明けて床下から出て、体を伸ばし新鮮な空気を吸うと、「ああ！ 生きていた」と、気持ちがすっきりしたものだだった。

昼間は何ごともなく安全だろうと思っていたら、突然に騒々しい人声が響いてきたので何ごと

かと走っていくと、一人の女性がソ連兵によって引きずられて、地獄絵図のようなことが繰り返されていった。私は「ぼーっ」として立ちすくんでいると、父が飛んできて、「それを見てはいけな
い！」と私をうしろに引き戻したが、私は震えが止まらなかった。血まみれになったその人は、翌日二人の子供を残し、無念の涙を流しながら亡くなった。近くにいた人が、「戦争に負ければ、女性
はみんなあのような目に遭うのだ！」と、こともなげにつぶやいていた。このことは忘れることができない、悲しく悔しい思い出である。

九月十九日には会寧会世話人の努力でいよいよ三十八度線に向かう列車に乗ることになり、夜明けと共に駅前に集合した。列車は貨物列車で、重なるようにして座った。途中で列車がときどき止まるので、その短い時間を利用して線路に降りて用を足した。我が家ではまず小さい子を先に降ろして用を足し、逐次大きい者が交代で降りたが、あるときには降りている間に列車が急に動き出

し、慌てて引き上げられるというような、冷や汗をかくことがあった。取り残された人も少なくなかったようだ。

九月二十一日、列車はやっと三十八度線の街、漣川駅に着いたが、ここでもソ連兵が多数いて、待望の京城（ソウル）入りはすぐには難しく、再び北に戻された。みんなは悔し涙にくれてしまった。鉄原まで戻りその日はここに泊まることになり、ひんやりとした夜霧の降りているホームで、思い切り手足を伸ばし深呼吸をしたことは嬉しかった。満月に近かったので、周囲は月明かりで夜目にも遠くまでよく見えた。考えてみると、先月の満月は興岩嶺の険しい山道を睡魔と闘いながら、歩いたことだった。会寧を離れて一カ月半、二度目の満月を鉄原のホームで迎えたことになった。次の満月はどこで迎えるのかと、ちょっとセンチメンタルな気持ちで襲ってきた。

そんな気持ちに突然に破られて、「ソ連兵だ！女は早く貨車の中に入り、内側から鍵をかけ

ろ！」という叫び声が耳に入った。私はすぐに近くの貨車に走ったが、もうすでに戸は閉められていた。絶体絶命となったが、近くにいた一人の男性が「危ない！早く貨車の屋根へ」と、登り口を教えてくれた。私は無我夢中で登ったが、そこはもう人でいっぱい私の入り込む余地はなく、かえってどなられる始末だった。致し方なく再びホームに降り、貨車の下にもぐり息をころしていた。車輪の陰に身を隠していたが、皮肉なことに煌々とした月明かりが差し込んできて、私の体は外からは丸見えとなり、何とも言えない恐怖感に包まれた。だれも助けには来なかった。そのとき初めて、「自分の身は自分で守るしかない」ことを悟った。すぐに数人の乱れた足音が近づいてきて、そしてだんだんと遠ざかって行った。その中には女性の声も交じっていたが、あまり取り乱した様子もなかった。女性の後ろ姿を車輪の間から見送った。やっとの思いで父母の所に戻り、そのことを話した。母が、「あの女性は売春を業とし

ていた人で、私たちの身代わりとして自ら申し出てくれたそうよ」と、静かに話してくれた。他人のために自分を犠牲にする行為を、決して忘れてはならないとしみじみ思った。

恐ろしかった一夜が明けて、父が外から戻って来て、「いま、この列車に二両の無蓋車を連結するがそこに移るか？」と言ったので、私たち家族は賛成したが、周りの人たちから「それは危険だ！ 無蓋車ではソ連兵に飛び込まれたらおしまいだ。荷物も取られるし娘さんも危険だ。やめた方がよい」と注意された。父も一瞬ためらったが、私が「どうしても行きたい」と言ったので、移ることになった。貨車は汚れていたが広々としていて、子供たちははしゃぎ回っていた。列車は北に向かって動き始めたが、私たちは不安であった。しかしどうすることもならず、すべてを天運に任せるほかなかった。

鉄原を出発して最初の小さな駅に差し掛かると、速度を落としゆっくりと通過していたが、そ

の駅から一人の男性が飛び乗って来た。私たちはびっくりしていたが、男性の方も緊張した面持ちであった。男性の言うことには、「あなた方は何をしていますか？ このまま北に行けば大変な目に遭いますよ。私は日本からこっちに戻って来て、歩いて三十八度線を越して来た。今なら警備も手薄ですから、歩いて南に行けます。次に列車が止まったら急いで下車した方がよいですよ」ということだった。初めて知らされた敗戦後の正しいであろう情報だった。私は早速に義兄に話したが、一番心配したことは病身の母のことであった。母の決意ひとつで行動を決めることにしたが、母が「どちらに進んだ方が希望があるの？」と言ったので、すかさず「もちろん、団体から脱走して南に行くことよ」と答えたら、母は何の不安もなく、「それではみんな逃げましょう」と言った。男性に感謝して一同は身仕度を整えて列車が止まるのを待っていた。やっと平康駅に着いた列車から、私たちはホームの反対側の畑の中に

飛び降りた。荷物はあの男性が次々に投げおろしてくれした。最後には、「勇気を出して歩きなさい！」と言って励ましてくれた。

父は、団体の責任者に単独行動をとることを伝えたところ、みんなから「危険だからやめなさい」と言われたが、父の決心も固く、別れを告げてきたとのことだった。列車はそのまま北へ向かって動いていった。私たちは何ともいえない細かい気持ちになって、トウモロコシ畑から離れて行く列車を見送った。

父は、「さあ！我々小島家だけの逃避行となった。心をひとつにして歩こう」と力強く私たちを励ましてくれた。一家は一步一步南へ向かって歩き始めた。

九月二十三日夜半、月明かりを頼りに歩き続けていたとき、遠くに光を見付けそれに向かって歩き、そして一軒の農家にたどり着いた。この家の主人は温かい人で、子供の体調がよくないのを見て、しばらく留まるようにと言ってくれた。その

言葉に甘えて二、三日逗留し稲刈りを手伝っていたが、周囲の人の心がだんだんと悪くなるとその主人にも迷惑がかかると思い、出ることにした。

九月二十九日、歩いていると珍しく大雨に遭い、一件の農家に助けを求めた。雨が止むまでいてよいと言われて、納屋に入った。すると近所のオモニたちが、次々と食べ物を持って来てくれた。子供たちを哀れんできたことだったが、その温かい心に涙ぐんだものだった。乳飲み子の二人共元気がないので、見ると顔に発疹が出ていた。どうやら麻疹はしかにかかったようであった。運を天に任せるほかに道はないと、病児を抱えて出発することとした。

九月三十日、金剛山鉄道にぶつかり、亭淵に出た。そこで付近にはソ連兵がいることを聞き、恐怖の中を突破し、やや安どの思いの中で平康郡を通り金化郡に入ったが、そこで親切な夫婦に巡り会った。その人は、金化郡西面道里の金点栄夫妻である。自分たちには子供がいないので一人養子

に欲しいと申し込まれたが、それだけはと丁寧に断った。雨はなかなか止まないで、数日ご厚意に甘えて滞在した。父は、今まで大事に持ち続けてきた懐中時計をお礼として渡した。

十月四日に京畿道の抱川郡に入り、いよいよ三十八度線が近くなり、それだけ危険も迫ってきた。ソ連兵が二百人ぐらい駐屯しているとの情報が入り部落の人が親切にいろいろと注意してくれた。ソ連兵の目から逃れるために山中に入り、岩石の多い峠を越えたが、のちにそれが外金剛山であったことを知った。山を下ると今度は川また川で全身びしょ濡れとなり、みんなはへとへとに疲れてしまい、川辺で野宿することになった。父と義兄が枯木を集めて暖をとり、衣服を乾かしぐっすりと眠ってしまった。

十月五日、ゆっくりと眠ったので、気持ちのよい目覚めであった。周囲を眺めると、その川原は美しく川もきれいだった。しかし、川は山から蛇行していたので、昨夜は何回も川を渡った気に

なっていたのだ。父と義兄は、夜通し枯木を燃やし続けていたようだった。感謝の気持ちでいっぱいだった。御飯を炊き腹いっぱい食べ、さらに握り飯を作って各人が持つことになった。

樵道を登り始め、義兄が先頭で父がしんがりとなった。何分急な山道で、一人通るのがやっとという細い道をあえぎながら登るのだが、子供たちは案外元気だった。病身の母は、大分こたえているように遅れていた。そのとき、突然に母が「お父さんが落ちた！ 梅子早く来て！」と叫んだ。

私もびっくりして背負っていた荷物をおろし、崖下にずるずると滑り降りて行ったら、途中で木の枝にすっぽりとはまった形で助けを求めている父に遭った。私は足場を確かめながら手を伸ばし、父の手を握って渾身の力をふりしぼり父を引き上げた。秋の日は短く辺りは薄暗くなってきたので、足場に気を付けながらぐるりと回り込んだ時、父が「梅子！ あれを見なさい」と、彼方を指さした。見ると、さっき父が引っ掛かっていた

木が見え、その下は絶壁の岩だった。頑丈な木の枝が張っていて、それに支えられていたので幸いであった。私は目がくらみ、声も出なくなつた。

日ごろ不信心の私も、思わず神様に感謝した。

やっとの思いで父と山頂に戻ると、みんなは心配して待っていた。みんなに様子を話すと驚くと共に胸をなで下ろした。気持ちを立て直して山道を下つた。

この辺りで野宿をしようと思つていたときに、前方にぼつとした明かりが見えた。樵小屋であった。「軒下でもよいから休ませて欲しい」と頼んだところ、好人物なその小屋の主人は、「狭いの中に入れ」と言ってくれたので、十二人の家族は喜んで入れてもらった。オンドルも焚いてくれたが、そのぬくもりは私たちを心から安らかにしてくれた。父がその主人に「三十八度線は、あとどのくらいか？」と聞いたら、「今、あんたたちが通ってきた山の頂上が三十八度線で、ここはアメリカ軍の支配下だ」と言つた。これを聞いた私

ちは、一瞬天からの声のごとくに聞こえた。そして思わずみんなで万歳を叫んだ。三十八度線をこの子連れの十二人家族が自力で越えてきたのである。自然に万歳という声が出たのも、不思議ではなかつた。その小屋では、ゆつくりと安心して眠ることができた。

翌日朝食を頂き、八時ごろ小屋を出発し、加平に向かったが、みんなの足並みは軽かつた。加平まで約七里と言われ、明日は着くであろうと一同の表情も明るく、内地に着いたら何をしようかとあれこれ勝手なことを言いながら歩いた。大村里の宿に泊まり、みんなは嬉しさでしばらくは眠れなかつた。

十月七日、元気を回復した私たちは足取りも軽く山を下りたが、やがてアメリカの旗を立てたトラックに行き交うようになり、やっとなどのおろした。それからの旅は、今までの緊張感がゆるみ、気持ちのうえではのどかな避難行となつた。父がどこからか小さな山ぶどうを取って

きた。その甘酸っぱい香りと味に、みんなは舌づつみをうった。

加平村に着いたら、まだそこには日本の郵便局長が残っていて大助かりだった。三十八度線を越してきた避難民は初めてということで、米兵も村人も珍しがって私たちを見に来る騒ぎだった。局長の話では、私たちの歩いて来た道は外金剛山で、よくここまで来れたと驚いていた。金剛山は朝鮮随一の名山で、あの絶壁を思い出すと背筋が寒くなるが、それよりも、名勝の地を歩いて来たことは大変な経験で、終生忘れられない思い出になった。

十月八日、局長の尽力で京城までの乗車券を手に入れることができた。お世話になった郵便局長は信岡芳久という福島県出身の人で、私たちには忘れられない人となった。その日の夕方には京城の城東駅に着いた。避難民収容所となった東本願寺に収容されたが、そこには多くの避難民がいた。途中には露店が立ち並んでいて、いろいろな

食べ物を買っていたが、お金さえあれば何でも手に入るようだった。避難民の服装もござっぱりしていて、私たちは急に自分たちの惨めな身なりに恥ずかしさを覚えた。

避難民登録所に父が手続きに行き、会寧からのことを細かく話したところ、係りの人は「会寧から三十八度線を自力で越して来た人は三組目だが、前二組は若者たちで、小島さんのように子供連れで避難して来たのは初めてだ」と言われたそうだ。私たちも、そのように言われてみると本当に夢ではないかと思うようになった。私たちのことを聞いて、北朝鮮に家族のいる召集兵たちが様子を聞きに来て、それを手立てに北朝鮮に行った人もいた。

十月九日から約一カ月、京城に留められたが、その間に父の知人より食べ物、衣類などを頂き感謝して過ごした。

十一月六日、やっと乗車確定、朝七時に京城を出発した。

十一月七日のまだ夜の明けきらない五時ごろに釜山鎮らしき駅に着き、そのままの状態で待機したが、車中には電燈もなく、一同黙々として夜の明けるのを待ったが、結局は乗船の都合で数日釜山で留められることになり、第七国民学校に収容された。

十一月八日は珍しいほどの好天であったが、十一月ともなると吹く風はさすがに身にこたえる。予定が早まり乗船の指示があつて波止場に向かったが、十歩行つては止まり、またしばらくして歩き始めるとまた止まるという有様で、いつ乗船できるとかだんだんと不安な気になり、ついには今夜はここで露営するのかと覚悟を決めたあと、十時ごろになって再び乗船が開始された。しかし、風の駆除と荷物の検査があつて、そのあとやつと乗船者の列に並ぶことができた。

十一月九日十三時になつて、やつと乗船開始。十六時には出港した。ついに朝鮮を離れた。もう再び来ることはないであろうと自分に言い聞かせ

た。乗船後、次姉の長女の容態が急変して、息を引きとつた。あと一步で日本に上陸し父親に会わせたかつたのにと、姉は抱きしめながら泣いた。引揚船は、朝輝丸という約二千屯ぐらいの船で、あふれるばかりの人を乗せて一路日本に向かつた。

十一月十日朝、晴れあがつた仙崎港の沖合に停泊した。「国破れて山河ありか？」と、父はまだ明けやらぬ洋上から港の方を見ながらつぶやいていた。再び船は動き出し、陸地に近くなると緑の濃い山々が見えはじめたが、それは朝鮮では見られない光景であつた。「日本は何と麗しい国であろうか？ 日本人に生まれてよかつた」と強く感じた。仙崎港に着岸、内地の土を踏んだ。その夜は市内の民家に宿泊し、温かいもてなしを受けた。船中で亡くなった陽子は地元の方のお世話で茶毘に付すことができた。帰国第一夜は、安どと喜びが交差するな過ぎていった。

十一月十二日、仙崎から下関に出て、そこで長

姉一家は義兄の実家の鎌倉に向かい、私たち五人は取りあえず知人を頼って福岡県の長井鶴に行つた。夕刻に芳賀家に着き、温かいもてなしを受ける。着ていた物はすべて大釜で煮沸して、虱退治をした。

十一月十六日、次姉親子を栃木県の宇都宮にある主人の実家に送り届けるために、母を芳賀家に残して出発した。列車は朝鮮と同じで窓ガラスなどは全然なく、そこから出入りする有様だった。

二日ばかりで宇都宮に着き、かなり歩いて平手家にとどり着いた。先に復員していた義兄が、驚きと喜びとが交差して大騒ぎとなったが、姉が長女を亡くしたことを話すと、義兄はただ涙ばかりで声が出なかった。

疲れが出たのか大人三人は同時に熱を出して倒れた。発疹チフスと診断されて平手家の別室に隔離された。一週間ばかりで快方に向かったが、何分、水ばかり飲んでいたので、立ち上がる事ができなかった。十二月二十日にやっと床上げと

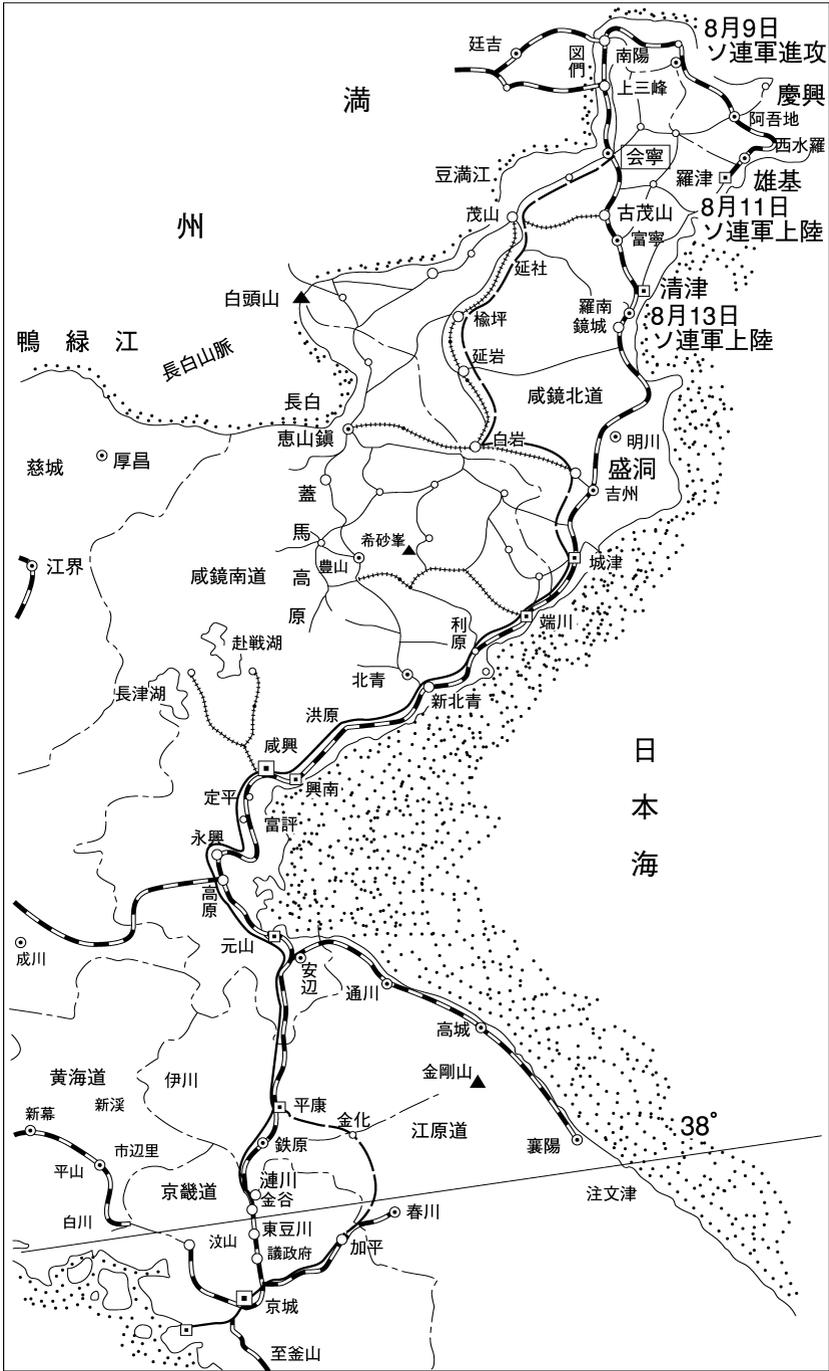
なったが、その間一人残った母も同じくチフスにかかり、十分な看病もできないままに亡くなった。たった一人でさぞ心細かったであろうと思うと、呆然とするばかりで涙も出なかった。

一月二日にやっと東京に出られるようになり、父は実家を探しに行ったが、幸いに神田神保町に小さな家を建てて生活していた。次いで母の姉である石倉家を日本橋茅場町に尋ねると、何と家はそのまま残っていて全員無事だった。運ということをしみじみ考えた。

一月十一日、芳賀家に着き、母の遺骨を前にした。父はそのときの気持ちを手帳にこう書いていた。

「亡妻静子の死は寂しいものであったが、かねて念願の芳賀家で御夫妻のもとで、十日間幸福な日を過ごし静かに死んでいったことは、避難行の終末としては、諦められない悲しみはあるが、静子にとっては満足であったかと思う」

そこで父の日記は終わっている。



〔避難の道〕

—— 歩いた道

—— 汽車に乗った道

昭和二十二年の春に、父と共に東京に移った。

私の希望を父が受け入れてくれたのだった。取りあえず鎌倉の義兄の実家に身をよせて、毎日就職先を探し歩いたが、私の服装を見て、にべもなく断られることが多かった。当時の私の食事は一日にコップパン一個であった。そのうちに栄養失調症になり顔が膨れ上がってきた。そんなころ、知人が「給料は安いが」と言って横浜YMCAを紹介してくれた。やっと私も働き場所を得た。キリスト教関係なので、ボロを着ていても注意されることはなかった。

そして昭和二十五年、新しく創設された産業復興公団に採用され横浜支部に勤務した。東京にある本部に月一回給料受領に出張することが楽しみであった。あるとき、八重洲口で長い行列があったので並んだら、小井一杯のおジャであったが、それが何ともいえないおいしいものだった。後年、終戦記念日には昔の苦勞を忘れないようにとおジャを作っているが、あのおいしさはも

う味わえなくなった。

その後、いろいろな有為転変を経て昭和三十九年に、慈恵医科大学の看護婦寄宿舎の舎監となり、以来二十年間、生き甲斐のある人生を送った。その後、縁あって結婚、今年で二十年が経った。転々と職を変えたが、その都度私は成長してきたことに深い感動を覚えており、引き揚げて来て五十九年、この体験は私から離れることはない。

引揚げ二百五十九日の旅

神奈川県 利根川 スミエ

戦前の生活

私は大正七（一九一八）年十一月八日、高松市宮脇町で生まれた。両親は士族の末孫で、子供の躰は厳格であった。兄弟は男四人女六人で、私は兄弟の中では下の方であった。家の中はいつも笑